

# 李正則氏の行為に関する意見書

関西学院大学文学部総合心理科学科教授  
三浦 麻子

## はじめに

この意見書は、李正則氏が犯罪行為の当時に置かれていた、角田美代子を頂点とするコミュニティが持つ状況的特徴に注目し、こうした状況が人を、時にきわめてネガティブな行為にすら着手させる方向に動かす「力」について、社会心理学的見地から考察するものである。

この事件における李正則氏の犯罪行為を考察するにあたり、角田美代子を頂点とするコミュニティ（以下、李正則氏の表現を借りて「角田ファミリー」とする）が持つ状況的特徴に殊更に注目することの意義は主に2つある。1つは、このコミュニティがきわめて特異なありようをしているために、それが人の心理や行動に及ぼした影響は甚大であると考えられるからである。もう1つは、たとえそうだとことをわかっていたとしても、他者の行為の原因を推論する際、パーソナリティや行動傾向など、その心理的特徴と行動との関連にこだわりすぎてしまい、状況の影響を軽視しがちなのが人間の一般的な傾向であることを、社会心理学者は知っているからである。

なお、筆者は、地裁と高裁の判決文、地裁第17回公判被告人供述調書、および、本人の自筆による長尺の手記を読み、また2017年11月2日および11月30日に大阪拘置所にて李正則氏と1時間にわたり面会し、ごく短時間ではあるが、本人と質疑応答をする機会を持った上で、この意見書を執筆している。本人の手記を引用した部分は《》で括った上で出典箇所を明記しており、字句表現はすべて本文のままとしている。

## 社会心理学の基本的アイディア

本件に関する具体的な考察に入る前に、まず社会心理学という学問の基本的理念について説明しておきたい。20世紀前半のアメリカの心理学者ゴードン・オールポートは、社会心理学を「個人の思考、感情および行動が、他者が実際に存在したり、想像の中で存在したり、或いは存在することが仄めかされていることによって、どのような影響をうけるのかを理解し、説明しようとする科学的試みである」と定義している。「人間とは社会的動物である」と言われる。人は日常生活において多くの他者と接し、様々な関わりを持つ。つまり日常生活には自分以外の他者が必ず存在しており、他者の存在が人の心理に影響を与えるということを意味している。また「社会的」という言葉には、2人以上の人々が相互に影響を与え合った結果、1人のときには見られないような現象（例えば、競争や協力）や関係（例えば、集団や組織）が生み出されるという意味も含まれている。こうした現象や関係がどのようにして起こるのかを明らかにしようとするのが社会心理学である。

つまり、ある人の心理や行動を理解するためには、その人の内面的な特徴と、その人が置かれた状況の特徴の両方を知ることが必要で、そのどちらが欠けても十分ではない。さらに、ある状況は人に何らかの影響を与えるが、その強さや方向はその人の内面的な特徴によって異なる場合がある、という両者の交互作用も考慮する必要がある。李正則氏だけでなく、角田ファミリーに「属していた」人々の行動を、そのコミュニティの構成員としてのそれとして解釈しようとするのが社会心理学的見地からの考察ということになる。

人は、他者の何らかの行為を見聞すると、「他者はどんな人間かをよく知りたい」という素朴な欲求にもとづいて、自動的にその原因を推論しようとする。取るに足らない行為であればそれほど深くは考えないだろうが、凶悪事件であれば犯人が「なぜそんなことをしたのか」を熱心に考えるだろう。こうした推論の際、人はその犯人の心理的特徴に注意を向けることが多い。一方で、その人が置かれた状況のもたらす影響は軽視されやすい。これまでの社会心理学研究は、こうした偏りが、そもそも人が他者の行動の原因を考える際、直感的にそれがその人自身のもつ特徴によって決定されていると見なしやすいという認知的なバイアス（歪み）によるものであることを示してきた。これを対応バイアスという。もちろん「あいつが悪い」という直感が正しいこともあるが、間違っている場合もある。正確な原因の推論のためには、こうした直感が正しいかどうかを検証するための熟慮のプロセスが必要で、その際に徹底すべきは直感では考慮されにくい部分、すなわち状況的特徴の精査である。この事件では、角田ファミリーが特異であるからこそ、その必要性は非常に高い。

### 社会的アイデンティティ：内集団をひいきする心理

人があるコミュニティの構成員として行動する場合には、どのような特徴が見られるだろうか。それを考える際に重要な社会心理学的概念が社会的アイデンティティである。社会的アイデンティティとは、人のアイデンティティ（自分が他の誰でもない自分であるという感覚）のうち、自分がどのような集団に所属しているか、自分がどういった社会的カテゴリーに該当しているか、という自覚にまつわるものである。社会的アイデンティティが人の心理や行動に及ぼす影響は多岐にわたり、また強固なものであることがわかっている。ある集団や社会的カテゴリーに属しているという感覚は、人が「その一員らしくあろう」とする方向に機能し、それを反映した行動を生じさせる。もっとも顕著なのが「内集団ひいき」と呼ばれる行動である。人は、社会的アイデンティティを手がかりにして自他を「どの集団に属しているか」で区別するが、単に区別するだけでなく、自分と同じ集団つまり「ウチ」を利する（つまり、自分と異なる集団つまり「ソト」を利さない）行動をとりやすいのである。

こうした社会的アイデンティティはどのように形作られるのか。きっと多くの人が思い浮かべるのは性別や民族にまつわるそれであろうから、長い歴史や文化に根ざすもので、なおかつ一旦形成されれば動かされにくいものだろうと思われるかもしれない。しかし、それは取るに足らない手がかりだけで形作られ、しかも行動に如実な影響を及ぼすことを

示したのが「最小条件集団実験」である。この実験では、複数の参加者を1つの部屋に集めて2枚の抽象画を見せ、どちらを好むかという基準で彼らを2つの集団に分けた。つまり、たまたま集まった部屋の中でのみ存在し、取るに足らない理由で分類されただけの集団を作ったのである。実験では、どちらかの集団に分けられた参加者に、手持ちの「ポイント」を他の参加者に分配することを求めた。ただし、分配が可能な相手について与えられた情報は番号と所属集団のみで、個人的な好み（例えば気の合いそうな性格だとか、好みの顔だとか）が反映する余地はなく、参加者同士で会話が交わされることもなかった。実験の結果は明確で、自分と同じ集団の人により多くの報酬を分配することが示された。これを内集団ひいきという。この実験で参加者が分けられた「集団」は実に取るに足らないもので、「こちらの絵を好む人は優しい」といったステレオタイプ（ある集団の特徴として社会的に共有されている固定的なイメージ）や「どちらの絵を好むかには長い争いの歴史がある」といった集団間の利害対立やその歴史など、「ウチ」と「ソト」とを区別して扱うような現実的・合理的な理由は存在しない。それにもかかわらず内集団ひいきが顕著に生じたのである。

さらに、こうした内集団ひいきは相手が仲間だということをお互いに知っている時に生じやすいことが明らかにされている。例えばAとBの2人がいるとして、AはBが「ウチの人」だと知っているとする。ここで、BもAが「ウチの人」だと知っていれば、つまり、お互いに相手を「ウチの人」だと分かり合っている状況であれば、AはBをひいきする。しかし、BはAが「ウチの人なのかソトの人なのか知らない」のであれば、つまり、2人が「ウチの人同士」だと分かっているのはAだけという状況であれば、AはBをひいきしない。言い方を変えると、内集団ひいきは、集団に属する人々がお互いに「あいつは嫌な人間だ」と思われたくないという意識をもつからこそ生じるということになる。人は「ウチ」だと認識し合っている集団の中では助け合うのが当たり前で、もし助け合わなければ自分が痛い目を見るということを直感的に理解しているのである。しかもその「ウチ」「ソト」の感覚は、ごく簡単な操作でも区別が明確でさえあれば容易に形作られる。

これらを李正則氏が置かれていた状況にあてはめると、手記に《味方や助けもない閉塞された環境》（添付資料 2-① 10 頁）と記されているように、自らの家族からはほとんど切り離されて角田ファミリーのメンバーとして扱われ、閉鎖的な空間で集団生活を送っていたために、それ特有の社会的アイデンティティが形成され、それに基づく集団を利する行為が日常的に出現していたと考えられる。一般に、生存のための脅威（貧困や伝染病、あるいは戦争の歴史など）が数多くある環境にあるコミュニティは、その維持のために厳しい規範（メンバーが守るべきルール）を設けやすく、それからの逸脱行動を厳しく罰する傾向がある。実際、角田ファミリーは《美代子は輪を乱したり謀反者はとにかかく許さない》（添付資料 2-⑬ 15 頁）コミュニティで、《「裏切り」「背任行為」》（添付資料 2-⑬ 14 頁）には相応の制裁が加えられていた。制裁を受けないためには仲間だと認められることが必要で、仲間だと認められるためには美代子に従う必要があったのである。

## 服従：権威者としての角田美代子

さらに角田ファミリーの状況的特徴に分け入って考察を進める。このコミュニティのもっとも顕著な特徴は、角田美代子が絶対的な権威者として君臨していたということである。李正則氏の話によれば、知り合った頃は「単なるおばさん」と思っていた角田美代子になぜ義父が絶対服従し反抗しないのかを訝しく思っていたが、彼女の発言の中に登場する暴力団関係者の氏名とその関係性についての情報が正確で、しかも自分から見れば雲の上のような人々と親密な関係であることが確信できるような内容であったため、また実際に《見るからにヤクザだと分かる強面の人と対峙しても全く怯むことなく立ち向かって行く》(添付資料 2-② 2-3 ページ) ような姿をたびたび目の当たりにすることによって、《美代子は本当に私のような者が手には届かない雲の上に居てる人物なんだと本気に思うようになった》(添付資料 2-① 5 頁) と態度を改めざるを得なかったという。角田美代子に《猜疑心や胡散臭さ》(添付資料 2-② 7 頁) は感じつつも《得体の知れなさ》(添付資料 2-⑩ 12 頁、他にも添付資料 2 には同様の表現が繰り返し出現する) に恐怖心を抱き、逆らうことは困難だ、逆らうことは自らの生命の危機に関わる、という感覚を持っていた。この感覚は、それぞれにきっかけは異なるかもしれないが、李正則氏だけではなく、このコミュニティに属した人々がすべて持っていたものだろうと考えられる。

人は権威に容易に服従する。このことを端的に示したのが、アメリカの社会心理学者スタンリー・ミルグラムによる「服従実験」である。ミルグラムはユダヤ系アメリカ人で、第 2 次世界大戦中のナチス・ドイツによるユダヤ人大虐殺(ホロコースト)に強い衝撃を受け、なぜ人が何の罪もない人々の命を易々と奪うに至ったのかを解明することを試みた。実際に権威者からの命令下に置かれ、権威者からの命令が理不尽なものであった場合、人はそれに抵抗を示すだろうか。それとも服従するだろうか。

この実験に参加したのは、学習における罰の効果に関する心理学実験への協力を呼びかけられて集まった一般市民である。エール大学の実験室に到着した彼らは、一緒に実験に参加するというもう一人と対面する。この人物はミルグラムの意図を知って演技をするサクラであったが、そのことを参加者は知らされない。2人はくじ引きで教師役か生徒役に割り振られるが、これも参加者が必ず教師役となるよう仕組まれていた。教師役と生徒役は壁を隔てた別の部屋に入り、マイクを通じて声だけは聞こえるようになっていた。教師役が 4 択問題を出題し、生徒役がそれに答える。生徒役が誤答すると、教師役は罰として電気ショックを与えること、誤答が増えるごとにその程度を徐々に上げていくことが求められた。出題の前に教師役は、生徒役が椅子に固定され、腕に電気ショックを受ける電極を装着される場面を確認し、またごく弱い電気ショックを自らも体験して、自らがこれからのような状況で何をするのかを理解してから実験に着手している。生徒役は頻繁に誤答し、教師役は生徒役にどんどんと大きな電気ショックを与え続けなければならなくなる(実際はすべて録音された音声流されているだけで、電気ショックも与えられていない)。

参加者たちがいつ実験者に抵抗を示し、電気ショックを与えるのをやめるのかを知るのが

この実験の目的である。参加者が「やめたい」という意思を表明すると、実験者は4度にわたって継続して欲しい旨を伝えた。それでも中断するという参加者はそこで実験を終了とした。実験者の説得に応じた場合は、そのまま実験を継続した。電気ショックは15ボルトから450ボルトまで15ボルト刻みの31段階あったが、ミルグラムによる第1実験では、40人中26名が450ボルトの最高段階まで電気ショックを与え続けた。つまり過半数は電気ショックを与えることをやめなかったのである。その後さまざまな状況を変えた追加実験が行われたが、ほとんどの場合に多くの参加者が服従傾向を示し、実験者の命令に応じて生徒役に罰と称して電気ショックを与えるという行為に従事し続けた。参加者は生徒役が苦しみもがく物音を聞かされ続け、ついには一切の反応がなくなっても問題を出し続け、電気ショックを与え続けるのだが、事前には「電気ショックは痛みを伴うものであるが、深刻な後遺症が残るなど生命に関わるようなものではない」と説明されていた。参加者には、自らの行為は残虐であるが、一時的であり決定的なものではない、と言い訳できる余地が残されていたのである。李正則氏が暴力を振るった際の述懐には《角田家内での暴行や虐待を目にしても、この程度の怪我や傷で騒ぐことはないと思ってました》(添付資料2-① 2頁)といった、コミュニティで発生した数々の暴力行為の残虐さを、自らによるものも含めて、高くは見積もっていなかったことを感じさせる表現が度々見られる。こうした心境は、服従実験で服従し続けた参加者の心境と共通するものがある。

1960年代に行われたこの服従実験は、人が、その個人レベルの心理的特徴によらず、状況の力にかくも脆弱であるという衝撃的な知見を示したが、それだけに参加者に非倫理的な行動を強いるものとなっているという強い批判を受け、ミルグラムは大いに批判され、そのままの形では追試ができなくなった。しかし、21世紀に入って、参加者にかかる心理的負担を極力減らした形で行われた追試では、世界各国(アメリカ、ポーランド、日本)でミルグラムの得た知見と同様の結果が得られている。つまり、時代の変化や文化的背景によらず、こうした権威への服従傾向は頑健に認められるのである。こうした場面に自分が置かれると想像するだけの範囲であれば、単にくじ引きで決まった教師役と生徒役の関係において、たとえそうすることが決まっていると言われたからといって、そして、誤答する生徒役への罰だからといって、きわめて大きな電気ショックを与えるのは不合理だと考えるだろう。しかし人は、実際にそうした場面に行き合わせると、好むと好まざるとに関わらず、そうした不合理な行動をとるのである。

ミルグラムが服従実験を着想するきっかけとなったホロコーストにおいて、多数のユダヤ人虐殺に関与したとして逮捕されたナチス・ドイツの警察官僚アドルフ・アイヒマンは、自身の行為を「命令に従っただけ」だと主張した。この発言を聞いた世界の多くの人々はなんという責任逃れかと大いに驚き呆れたが、服従実験の参加者も、それぞれが元来加虐的特徴を持っていたわけではなく、状況が彼らをそうさせたのである。李正則氏は事件を振り返って《美代子を増長させた原因は私たち一人一人の責任です。何でもかんでも従い美代子を担ぎ続けたからとんでもない大事件に発展したのです》(添付資料2-③ 3頁)と述

懐している。アイヒマンの「無責任」な証言とは異なるように聞こえるかもしれないが、増長したのは彼らではなく美代子だったと述べているのだから、本質的には同様だろう。

角田美代子が権威者として君臨する角田ファミリーでは、彼女の機嫌を損ねた者は、コミュニティの規範を破ったものとして制裁の対象となった。李正則氏はその多くの場面で率先して暴力をふるったという。ミルグラムの服従実験のような 1 回限りの関係とは異なり、彼らのコミュニティには継続性があった。もし自分が権威者に服従しなければ、それが規範を破る行為だと見なされて、次に制裁の対象となるのは自分かもしれない。実際、前記被告人供述調書によれば、一貫して制裁を与える立場にあったわけではなく、自分自身がその対象となり、身体的な危害や侮辱的な行為を加えられたことも度々あったという。コミュニティに属する人々のうち、《小学一年生から高校三年生まで野球をしてきましたので、普通の人よりかは体力も腕力もありました》(添付資料 2-① 1 頁) というとおり体が大きく力があり、さらには《昔から喧嘩をしたり悪さも繰り返してました》(添付資料 2-① 2 頁) というようにもっとも暴力的な行為に慣れている一方で、ファミリーの中で角田美代子との関係が相対的に遠い李正則氏は、より近いメンバーたちよりも権威への服従の証を立てる必要性が大きく、またそれを暴力として見せるのが自らにとっても周囲にとってももっともわかりやすいその表明だったと考えられる。つまり、角田ファミリーで李正則氏に与えられた役割は、逸脱者への罰として暴力を見せつけることであり、それは彼にとって自分自身を逸脱者とさせないための方略でもあった。面会において李正則氏は、たびたび自らのことを「せこい」と形容した。また手記でも自らのことを《自分の身を守るだけの脳しか持たない卑怯な臆病者》(添付資料 2-① 5 頁) と表現している。コミュニティの中で自分がどう振る舞えば自らをリスクに晒さずに済むか、常に考えながら行動を決めていたということであろう。そしてそこには前提として、角田美代子への服従があった。

#### 没個性化：与えられた役割としての「暴力装置」

権威者に服従し、コミュニティで与えられた役割を果たすという目的のために行動するようになると、人は自らがどう行動したいかという自由を自らによって奪い、与えられた役割らしい、あるいはそれが過剰に発揮される行動が優先して出現するようになる。これが没個性化である。ミルグラムの高校の同級生で、同じくアメリカの著名な社会心理学者フィリップ・ジンバルドの「スタンフォード監獄実験」は、ランダムに「看守」か「囚人」のいずれかに割り当てられた人々に、刑務所を模した実験室で集団生活をさせ、囚人役には囚人服を着せて自由を奪い、看守役には警棒を持たせて囚人役を取り締まり「所内」の秩序を保つように求めた。ここでもミルグラムの服従実験と同じく、参加者は一般市民であったが、囚人になるか看守になるかは偶然によって決まっており、囚人役が何の罪を犯したわけでもない。しかし数日のうちに参加者たちは急速にその役割に埋没し、囚人役は鬱症状を呈したり、集団を作って看守に刃向かおうとしたりし、看守はそれを暴力的な対応で制圧したり、とってつけたような理由で拷問を加えるようになった。参加者たちの没個性化の程度がきわめて強かったために、ジンバルドは 2 週間を予定していた実験を 6

日で中止せざるを得なくなった。

角田ファミリーでの生活は、こうした模擬監獄状態にきわめて近かったと考えられる。しかも、それを制御できる立場にある人は誰もいなかった。李正則氏はもちろん看守役である。事件を報道する多くのマスメディアが彼のことを「暴力装置」と形容した。角田ファミリーでは、李正則という一個の人間が没個性化し、看守役という与えられた役割を果たすために存在していたと考えれば、この表現は言い得て妙だったのかもしれない。手記にも（残虐な行為を）《何回か目にしていると感覚も麻痺してしまい見慣れた光景、この以上で狂いきった環境が俺らの棲む世界では普通のことなんだろうと思うように成り下がってしまうのです。信じたくも認めたくもありませんがこれが私達の考えであり、姿だったので。悪いことも悪いと思わなくなるまでは本当に早かったです》（添付資料 2-⑫ 29-30 頁）との記述がある。特に、決定的な罪の頂点（例えば死体遺棄の現場）においては、彼はまさしく人間というよりもその行為のために作られた「装置」と化していたのではないかと考えられる。自らを「せこい」と形容する李正則氏であるが、一方では死体遺棄においては無我夢中で自分が自分ではないようだった、と述懐していた。最初は自覚的に役割を与えられてそれに沿って振る舞うのだが、徐々にその役割に自分が乗っ取られてしまい、装置となり果ててしまう。李正則氏の中には、「せこい」冷静な判断による行動着手と、没個性化後の暴力装置発動との同居が見て取れる。そしていずれも、彼が置かれた状況が、そうさせる強い力を持っていたと考えられる。

模擬監獄状態の中で「囚人」だった人々が殺され、絶対的権威者として君臨していた角田美代子が死亡し、残された者たち、つまりかつての服従者たちによってしか角田ファミリーの内実が語られない今、なぜそこまでの権威を彼女が持ち得たのか、それによりコミュニティがどのような状況に陥っていたのかを詳らかにすることは難しい。角田美代子の死によってこの事件の罪を彼女に贖わせることが不可能となった今、コミュニティの中でもっとも暴力的だった李正則氏が「スケープゴート」的な扱いを受け、事件を牽引する立場の人間だと見なされるのは、人には「原因を行為者の心理的特徴に過剰に求めたがる」メンタリティがあることを考えれば、ある意味当然の成り行きであるかもしれない。しかし、少なくとも李正則氏は《頼太郎・健太郎・優太郎らは前科もなくおとなしいとのことで世間からの注目度は低いですが、実際はどうなのかと云いますと発言力もあり美代子の息子と云うことで大事にされ皆んなからは寵愛されており私らが文句を云ったり逆うなどは絶対に許されるものではありませんでした》（添付資料 2-④ 2 頁）と述べている。角田ファミリーのメンバーたちは皆、それぞれにふさわしいあり方で美代子に対する服従が求められ、それに応じていたのではないだろうか。李正則氏の場合は、暴力的行為が常に身近だったという生育歴・人生経験と、美代子により近い角田ファミリーのメンバーへの盲従も強いられているという自らの立場が重ね合わさった時、彼が生き残るためにもっともわかりやすい手段が、逸脱者への暴力という形での服従だったのである。

## 結語

最後に本意見書の主張をまとめる。李正則氏が数々の犯罪（と認定された）行為の発露に至った根底にあるのは、李正則氏自身のきわめて特異なパーソナリティ、つまり残忍で無慈悲な心理的特徴にあるのではなく、人間が一般にもつ、状況に流されやすく、またそれを是としやすいという心理的特徴と、角田美代子という絶対的権威者を戴ききわめて特異なコミュニティのもつ状況的特徴の交互作用の所産である、というのが本意見書の主張である。

われわれ人間にとって、さまざまな行為の原因を行為者自身に求めたがるのはごく当たり前の心理であり、そうであるだけにそれにもとづく判断がより正しいと思込みやすい。また、対象となる行為が残虐であればあるほど、その行為者を厳しく罰することが世界の公正を保つのに有用だと考えやすい。なぜなら、その行為者を排除することによって（つまり、状況を変えなくても）、自分たちは日常の安寧を回復できるからである。しかし、社会心理学の幾多の知見は、そうしてしまうことには事実を見誤るリスクが潜んでいる可能性を示している。何らかの行為についてその原因を考える際は、そこに「状況の力」が介在している可能性と、われわれは誰しもがその強い影響下にあることを、同時に自覚すべきである。李正則氏の行為についても、彼がなぜそうしたのか、だけではなく、何が彼をそうさせたのか、という視点から、そして、それが暴力的なものであるにせよ、そうでないにせよ、関係者の諸行為には角田ファミリーというコミュニティに特異的な「状況の力」が強く関わっていたという意味では等価であることをふまえて、その犯罪性を検討すべきである。